個性『傀儡士』

野良風

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見た目は暁のサソリです。
傀儡の仕込みも同じ感じです。
誤字あり
話もおかしいかもしれません
が楽しんでください

目次

一話 …… 1
二話 …… 6
三話 …… 15
四話 …… 25
五話 …… 45
六話 …… 53
七話 …… 58
八話 …… 62

一話

試験開始
俺は、今
「行くか」
俺は、雄英高校の入学試験を受けている
そして、ヴィランロボットと戦っている
「脆いな」
俺は、自分が作ったヒルコと言う傀儡を使って戦っている
尻尾でヴィランロボットを壊している
「もう５０ポイントだな、稼いだな」
その時にポイント０のヴィランロボットが襲ってきたその影響で建物が崩壊
そして、逃げ遅れた人達の上から瓦礫が振って来た
「危ねぇ」
巻物から、黒蟻、山椒魚を出した
そして

黒蟻のお腹の中にいれ
山椒魚で防御をして助けた
助けた人達を黒蟻、山椒魚に乗せたまま避難させた
「早く逃げろよ」
そして、一人の少女が足を挫いていた
「うっ」
足を痛めながら逃げようとしている
「今、助ける」
ヒルコの尻尾を伸ばし尻尾を巻き付けその少女を助けた
「大丈夫か」
「大丈夫」
ポイント0のヴィランロボット達が此方に来た
「ち、取って置きを使うか」
巻物を出したが
試験終了
そして、試験が終了した
「終わりか」

「その、助けてくれてありがとう」
　助けた、少女が話しかけてきた
「気にするな」
「えっと、私の名前は芦戸三奈、君の名前は」
「俺は、サソリ」
「赤砂　サソリだ」
　そして、家に帰った
「ただいま」
「おー、帰ったかどうだった」
　俺を向かえてくれたのは、おばあちゃんだ
「どうだった」
「その前に、お祈りする」
　俺は、仏壇の前に座りお祈りをした
　俺の父と母はヴィランに殺された
　お祈りを終わると
「どうだったじゃ」
「結構良い線いったと思う」

「そうか」
「今日は、ご馳走にするぞ」
「分かったそれと、部屋に行って傀儡をいじってくる」
俺は、自分の部屋に行き今日使った、黒蟻、山椒魚、ヒルコのメンテナンス、修理をした
そして、合格発表の日
「ほれ、サソリ来てるぞ」
俺は、その場で手紙を切るとその中から変なのが出て来たと思ったとたん
『私が投影された!!』
そこには、オールマイトが写っていた
『なぜ私が投影されたかというと、なんと!!今年から雄英の教師として赴任することになったからさ!!』
『さて早速だが入試の結果を発表させてもらう
君は合格だ
そして、君は、ヴィランロボット破壊のポイントが５０レスキューポイントが９０と言う高ポイント
そして、君は、入学試験ダントツの一位だ』

「良かったなサソリ流石ワシの孫じゃ」
「あー」
「どれお祝いをするとするかの」
そして、ご馳走を作ってもらった
そして、初登校日
「扉がデカいな」
1―Aの教室の前に立っているが扉が大きい
「今日から始まるのか」
扉に手を掛けた

二話

扉を開くと
そこには、眼鏡を掛けた人と頭の髪がツンツンしてる人が言い争いをしていた
「何やってんだ」
サソリは、無視し席についた
そして、サソリは、入学試験の時助けた人がいたことに気づいた
「アイツも、受かったんだな」
サソリは、少し笑った
その時、先生が来た
「お友達ごっこしたいなら他所へ行け。
ここは、ヒーロー科だぞ。」
「(何か、薄汚れてるな)」
先生が教卓に着くと
「はい、君達が静かになるまで３２秒かかりました。
時間は有限、君達は合理性に欠けるね。

君たちのクラスの担任の相澤です。
早速だがこれを着て外に出てくれ。」
体操着を取り出した
そして
「これから個性把握テストをします。」
いきなりのテストが来た
「「個性把握テストォ!?」」
そして、場所移り
グラウンドへ
「では、それじゃあ、入試の成績が一位、二位の赤砂、爆豪前に出ろ」
「分かった」
「はい」
「では、まずは
先生が喋ってる途中で
「すいません、先に爆豪で良いですよ」
「分かった」
先生が了解した

「では、爆豪中学の時のソフトボール投げの記録、何メートルだ？」
「６７メートル」
　中々飛ぶな
「じゃあ個性ありで投げてみろ。」
　そう言って相澤先生は爆豪にボールを手渡すと
　爆豪は
「死ねぇ」
　爆豪の掌から爆発が起こり、ボールは吹っ飛ぶ
「死ねぇ？」
「まず、自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」
　爆豪、７０５．２メートル
「７０５って飛びすぎだろ！」
「個性思いっきり使えるんだ！おもしろそー!!」
「おもしろそう、か。
　お前たちはそんな腹積もりでこのヒーローになるまでの３年間を過ごすつもりか？
　よし、総合成績がビリだったものは見込み無しとして除籍としよう。」

「最下位除籍って・・・・・・」
入学初日ですよ！いや、初日じゃなくても理不尽すぎる!!」
面白そうだ
「自然災害、大事故、身勝手な敵たち。
いつどこからくるかわからない災厄。
日本は理不尽にまみれている。そういった理不尽を覆すのがヒーロー。
放課後マックで談笑したかったならお生憎、これから三年間雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける。
Ｐｕｌｓ　ｕｌｔｒａ《更に向こうへ》さ。全力で乗り越えて来い。
そしてようこそ。これが雄英高校のヒーロー科だ。」
「次、赤砂」
ボールを渡された
「ボールが地面に付かなければ良いんですよね」
「そうだ」
そう言うとサソリは、巻物を開き
「口寄せ・鴉」
鴉の上に乗りボールを山椒魚の口に入れ

走り出した
「そのままで何処まで行ける」
「ずっと行ける」
「じゃ記録は、∞で」
「「すげぇ～」」
第1種目は５０メートル走。
「次、飯田と赤砂」
位置に着くと
「よろしく頼む」
飯田が話しかけてきた
「こちらこそ」
『位置について、ヨーイ、ドン！』
飯田は、一気に前に出た
そして、サソリは飯田に糸を着けて移動た
『飯田３：０６』
『サソリ３：６８』
結構は、良かったが飯田に睨まれた

第２種目、握力測定。
握力は、苦手で
良い結果が出なかった
第３種目、立ち幅跳び
巻物を出し
「口寄せ・鴉」
鴉を使い空を飛び
記録はまたしても∞だった
第５種目、ボール投げ
俺は、最初に終わったから見ていると
麗日お茶子って言うヤツも∞をだしたみ見たいだ
そして、緑谷が投げようとした時
全く飛ばなくかった
どうやら、先生が何かをしたようだ
「個性を消した」
先生のマフラーみたいのが浮いている
「つくづくあの試験は…合理性に欠けるよ。お前のような奴も入学出来てしまう」

「抹消ヒーローイレイザーヘッドか」
二回目
緑谷は、指先だけ個性を発動させた
「先生…まだ動けます！」
「コイツ…！」
あの先生笑うんだ
「どーいうことだ！デクてめぇ！」
いきなり、爆豪が緑谷に襲いかかってききた
「ちっ」
糸を緑谷にくっ付けて避難させたが
爆豪は、先生に捕まった
「緑谷大丈夫か」
「ありがとう」
第六種目、上体起こし
記録は、良かった
第七種目、長座体前屈
足を広げても地面に着くから簡単だった

最後の種目、持久走
鴉に乗り楽々だった
結果は
一位だった
「ちなみに除籍はウソな。」
「!?」
「君たちの全力を引き出す合理的虚偽」
「「はーーーーーー!!??」」
「冷静に考えてあんなの嘘に決まってますわ。」
「(本気の目だったな)」
教室に戻ると
芦戸が
「あの時助けてくれたサソリだよね」
「そうだけど」
「合格したんだね良かった」
「これからもよろしくね」
手を出されたので握手をした

帰ろうとしてた時に
「君は、赤砂くん」
「サソリくん」
そこには、飯田、麗、緑谷がいた
「赤砂くん　、あの時ありがとう」
「気にするな」
「どうだろう、赤砂くんも一緒に帰ろ」
「良いねぇ帰ろ～」
「一緒に帰っていいかな」
「別に良いよ」
サソリは、飯田、麗、緑谷と一緒に帰った

三話

次は、オールマイトが授業しにくる

「私が」

クラスの皆がオールマイトの声だと騒いでいる

「ドアから普通に来た」

オールマイトがドアから出て来た

オールマイトだあぁ!!スッゲェ!!シルバーエイジのコスチュームだ!!!」

皆んなが盛り上がると、オールマイトはプラスチックに書いてあるカードを取り出した。

「今日君らがやって行うのは…!戦闘訓練!!」

「戦闘訓練!」

そして、戦闘訓練が始まる

サソリは、ヒルコの中に入り行った

「それが赤砂くんのコスチューム」

緑谷が目をキラキラさせていた

「この傀儡ヒルコは、俺が作った頼んだのは、耐火性の服を頼んだ」
「そしたら、模様もつけられたんだ」
　赤い雲のイラストがついている
「そうなの」
「此方の方がカッコいいからだそうだ」
「ってそろそろ時間になるぞ」
　そして
「さあそろそろ始めるぞ!!まず今回の授業についてだが…」
「先生!その前にペアはどうするのでしょうか?!」
　飯田が質問している
「…ブッとばしても良いんですか?」
　不機嫌な爆豪
「相澤先生みたいな除籍処分とかはあるんですか?」
　心配するお茶子
「実技訓練とはどのようなことをするんですか?」
　八百万百
「このマントやばくない?☆」

キラキラ変なヤツ
「うう～んん!!聖徳太子い～～!」
大変だなオールマイトは
「ペアはこのモニターで決めるヒーローチームヴィランチームと分ける。
ヴィランチームは核を守りきり、ヒーローチームは核の回収、または捕縛テープで相手を捕縛する。
時間切れは敵チームの勝ち。
核の回収、または敵チーム全員を捕縛すればヒーローチームの勝利になる。
他の人たちはビルの地下のモニター室で観測することになっている。
またヒーローも敵もお互い建物の見取り図を所持すること。
そして戦闘の場合、度が過ぎたら中断とする。
制限時間は15分。」
「そして、私も参加する。もちろん手加減もするからね。私が参加するわけは人数の関係上分けれなくて一人残るからだ。この幸運を掴むのは、誰だ」
「では、スタート」
モニターが動き
『ヒーローチーム、緑谷出久&麗日お茶子』

『ヴィランチーム、爆豪勝己&飯田天哉』
爆豪が暴れたりして大変な事態になったが
結果は、
ヒーローチームの勝利だった
「色々あったがでは、次行って見よう」
『ヒーローチーム赤砂サソリ』
『ヴィランチームオールマイト』
「(おもしろくなりそうだ)」
「すげぇ～ラッキーじゃんサソリ」
「うらやましい～」
「頑張ってね」
「良かったオイラじゃなくて」
行こうとすると
飯田、麗に止められ
「頑張りたまえ」
「頑張ってねサソリくん」
そして、スタートした

「まずは、偵察をするか」
巻物を出し傀儡を5体出した
「行け」
すると直ぐに傀儡が1体壊され場所を把握したサソリは、その場所に行きオールマイトの前に出た
「隠れてやらないのかね赤砂少年」
「隠れても直ぐに見つけるだろ」
「確かにな」
サソリは、巻物を出し
「口寄せ・鴉、黒蟻」
とその他にさっき呼んだ他に3体出した
「行くぞ」
「来い」
笑って言った
5体の傀儡を前に出し
「無数針」
5体の傀儡の口から針が飛び出した

がオールマイトの体には、刺さらなく
次に鴉の肘が空き中から玉が出て来て玉からガスが出た
しかしオールマイトはそれを降り払いガスを飛ばした
「甘いぞ」
「これならどうだ」
オールマイトの後ろに黒蟻がいる
そして、オールマイトを黒蟻のお腹の中に入れ
「黒秘技危機一髪」
鴉がバラバラになりバラバラになった部分から針が出て来て
黒蟻の穴が空いている部分に突き刺さった
バキバキと音がして
黒蟻のお腹が破られオールマイトが飛び出して来た
「(傷跡は、なし)」
オールマイトの筋肉により針が刺さらなかった
「ならばこれならどうだ」
１０体の傀儡をバラバラにしてバラバラになった部分から針を出しながらヒルコの尻尾で攻撃をした

「行くぞ少年、ＴＥＸＡＳ　ＳＭＡＳＨ」
　傀儡が吹っ飛び
　ヒルコも飛ばされた
「クソ」
　オールマイトがヒルコを殴り壊した
　そして、次にサソリを殴った
　が立ち上がった
「ヒルコも壊れたか」
「ならば取ってこれを出すか」
　サソリは巻物を出し
「白秘技・十機近松の集」
「行くぞ先生さっきまでと一緒に思わない方が良いですよ」
「来い少年」
　一気に7体襲いかかったがかわされた
「ならば、三宝吸潰」
　傀儡が3体並び口が開いたその口に
『仏』『法』『僧』

の字がありそして、竜巻がおきた3体の傀儡に吸い込まれそうになる
「中々やるじゃないか」
オールマイトが喋ってる間に後ろに傀儡を移動させ
「おら」
傀儡の口から玉が出て来たそして、爆発した
「まだまだ行くぞ」
『時間終了』
「終わっただと」
時間を忘れ時間が終了した
「ハァー」
サソリはため息をついた
「中々スジか良かったぞ少年」
「悪いけど先生この傀儡を戻すので先に帰っても良いですよ」
「そうか、分かった」
「それと、緑谷が心配だから保健室に行って来ます」
そして、サソリは保健室に向かった
保健室にいると相澤先生が来て

「そろそろホームルームをするから行くぞ」
「分かりました」
教室に行きホームルームを終わったら他のクラスメートが来た
「お疲れ赤砂」
そう言ったのは赤髪の少年だった
「いやー赤砂凄いなあのオールマイトと戦って」
「よく耐えたよね」
「ねえキミ☆今日の僕の活躍どうだった?」
「ちょっ…青山、赤砂途中で保健室に行ったろ」
大勢の生徒が赤砂の前に集まり聞いてきたため赤砂は少し動揺する
「俺、切島鋭児郎!よろしくな、今みんなで今回の戦いのミーティング開いてんだよ!」
「蛙吹梅雨よ…梅雨ちゃんと呼んで」
「俺!砂糖!」
「僕は青山優雅!きらめきが止まらない男だよ~☆」
「俺、瀬呂範太!よろしくな赤砂!」
「あ、よろしく」
サソリは、返事をした

「悪いが俺は、今日壊れた傀儡を直すのとパワーアップさせるから先に帰るじゃあ」
サソリは、家に帰り傀儡をパワーアップに励んだ

四話

朝　大型自動車が次々と道路を走っていき、目的地に着いたようだ。そう、そこはあのヒーロー学校、雄英高校だ。

「カメラ回すぞ」

「早く！行くぞ！」

そういったかけ声が交じり合い、雄英の生徒一人一人に声をかける。

「オールマイトの授業はどんな感じです!?」

マイクを向けた先は、ボサボサとした緑色の髪の緑色出久だった。

緑谷はビクッと体を固めた。なにを言えばいいのか分からない様子で

「え?!あっ、いやスミマセン…僕、保健室に行かなきゃいけなくて…あの…本当にすみません！では！」

「平和の象徴が教壇に立つのはどんな感じですか?!」

マイクを向けたのは茶髪で頬は赤らむ麗らかな女の子、麗日お茶子。　お茶子は考え

ながら
「えーっと…筋骨隆々？って感じです！ムキムキマッチョで、アメリカンで～…なんか、面白いです！」

「教師オールマイトについてどう思ってますか？」
　マイクを向けたのはメガネをかけた大真面目な飯田天哉。
「最高峰の教育機関に自分は在籍していると事実をことさら意識させられますね。風格はともかくユーモラスな部分など様々なものを感じますね。トップヒーローとは常にトップヒーローであり、トップヒーローとは、何がヒーローであるかを意識させ、ヒーローなるもの…」
　長々と話し出す飯田、マスコミは話し相手を選ぶ相手を間違えたという表情でため息をつく。

「オールマイ…あれ!?君確かヘドロのときの…」
「やめろ！」
　マイクを向けようとした先は、グギギと歯ぎしりする爆豪勝己。黒歴史を掘り起こされては当然の反応だ。無理もない…

ある意味ニュースにされ、騒ぎを起こした彼は有名人といっても間違いではない。
「すいません、オールマイトについて一言でも」
「・・・・・・・・・・・・・・」
サソリにも来たが無視をした

「オール…小汚!なんなんですかあなた!?関係者ですか!?」
マイクを向けた先は1ーAの担任、相澤消太だ。
相澤はマスコミに手をしっしと払いのける感じに
「彼は今日非番です、授業の妨げになるので帰って下さいそれと、赤砂遅刻寸前だぞ」
「すいません、昨日オールマイト先生に壊されたので朝まで直してました」
「次から気を付けろよ」
「あっ!ちょっ、待ってくださいよ!貴方雄英の関係者か何かでしょ!?オールマイトについて一言だけでいいですので聞かせて下さい!」
赤砂は、教室に行こうとしたら
ピーー!!
ガガガガガガガガガ!!!
校門のセンサーに触れてセキュリティが動いたきそのため門は完璧に閉まった

そのまま教室に向かった
かれこれ時間はＳＨＲの時間だ、連絡事項や生徒の出席の確認…様々だ。
「さてホームルームの本題はここからだ、早速で悪いが君らにどうしてもやって貰わなければいけないことがある」
「うわ！もしかして抜きうちテストとか!?」
「うわー！マジ最悪！相澤先生の場合、赤点の人は除籍処分とかされそー！」
相澤は発狂する芦戸と上鳴に
「お前ら除籍処分にされたいか？」
「嫌っす聞きます」
怒れる相澤を前に２人は恐縮している。
「それで、本題とは？」
サソリがそう聞くと
「ん、お前ら…今から…」
みんなはゴクリと唾を飲み相澤は雰囲気をまとってこう言った。
「学級委員を決めてもらう」
「クソ学校ッぽいのキターーー!!」
ヒャッホーイと歓喜の声をあげるみんな、みんなが予想してたのとは違ったため良

かったのであろう。
　ホッと一息つくと同時に、異常気象で突然嵐が発生したかのように、一気にクラスの皆んなが大きく騒めき出す。
「(学級委員か)」
　他のクラスメートが騒いでいると飯田が
「だからこそ複数の票に入ったものが、多数決で決めるというのはどうだろうか?それでこそ真の学級委員に相応しくないか!?というわけで先生!票で決めて宜しいでしょうか!?」
　皆んなを説得する飯田は、先生の方向に振り向く。ここでキャンプでもするのかとツッコミを入れても良いのだろうか、相澤先生は寝袋に入っていた。それも睡魔に襲われてるのか、眠たそうな顔をして。
「うん、まあ制限時間内に決めりゃあなんでもいいよ」
　やる気のない、ダルい声でボソリと呟くと、ゼリー状の栄養食品を飲みはじめた。

　そして
　数分後
　票が多かった数

緑谷出久　3票
八百万百　2票
飯田天哉　1票
その他1票、あるいは0票
「ぼ、ぼ、僕3票ーー!?」
選ばれたのは、緑谷出久だ。
「な、何でデクに…一体誰が…!」
ありえないと言う様子の爆豪
「まー、オメーに入れるよりかはマシかもな!」
「あぁ!?しょうゆ顔今なんっった…?」
「あ、いや…」
つい言ってしまったと後悔する瀬呂にキレる爆豪。
「……」
横目でなるべく爆豪を見ないようにしてるのはお茶子であった。
(爆豪くんにバレたら怒りそうで怖いな〜…)
心のなかでそっと言い聞かせるお茶子
「くっ…やはり誰も入れてくれなかった…!」

「他に入れたのね…」
　と言う蛙吹に砂糖は
「飯田、お前やりたかったのに誰に入れたんだ？」
「緑谷くんだ」
「じゃ、飯田に入れたのは」
　サソリは、飯田に入れていたのだ
　時間が来たため委員長決めは終わったことを確認し相澤は学級委員決めを締め切ることにした。
「学級委員は緑谷、副委員長は八百万だ、これで決まりだ」
　相澤がそう言い終わると八百万は
「んー、なんかちょっと悔しいですわ……」
「ま、ままママママ、マジでか!!?」
　横目で見やる八百万に緑谷は動揺を隠せない。
（ま、まさかぼ、ぼぼぼ僕が……うおおぉぉーー！）
　皆んなはどう反応するのか、飽きられたり、批判されたりしてしまわれるのか…そんなことを緑谷は考えていたが、それは大きく外れた。
「へー、けど緑谷いいんじゃね！なんだかんだ訓練の時熱かったし！」

「八百万は講評のとき凄かったからな！」
切島に続き、上鳴も納得したかのように声に出す。この二人は単細胞な為か、疑うことや否定論は全くない。寧ろ相手の良いところを見つけ褒める長所のある良い二人だ。
「…くっ！」
飯田は正直、少々心苦しいような、誰も選んでくれなかったような寂しさと悔しさの顔が浮かび上がる。
「チッ…クソナードが!!」
爆豪は緑谷が委員長になったことに悔しさ、怒り、ありとあらゆる感情が心の底から込み上げて来て、思わず掌から爆破を出すのを何とか我慢している。

昼食　食堂メシ処
「お米がうまい！」
ホクホクの白いご飯が盛られてるお茶わんを持って箸でお米を口に入れるお茶子。美味しそうに食べてるのが分かる。食堂では、緑谷、お茶子、飯田、サソリの四人が来ている。
ここはランチラッシュが安価で一流の料理をふるまってくれるので、食堂は快適だ。だがその分雄英高校では人が多く、食堂は常に混雑しているのだ。

「それにしても…学級委員だなんて僕が務まるのかな～…」
心配する緑谷に対して
「ツトマル！」
カタコトの飯田とお茶子
「うん、緑谷くんなら出来るさ！とっさな判断力と胆力があるから僕は君に票を入れたのさ！」
（あの1票僕に入れたのか！）
ついとっさに答えた飯田に緑谷はえー！っというような顔をする…当然本人にそんなことは言えない。
「けど飯田くんなら迷わず自分に票を入れるかと思った！だってメガネだもん！」
（理由そこ!?ていうか相変わらずざっくりくるよな麗日さん…裏表ない証拠なのかな？）
メガネだからと言うお茶子は自分の口元についてるお米をとって。
飯田は少々目をつむり、考えるように
「俺は、飯田に入れた皆をまとめれるきがしたからな」
「嬉しいよ、赤砂くん」
肩を叩かれ飯田は

「でも僕はぼくの正しいことをやったまでで…」
　ん？
　ぼく？
　僕??
「…」
「ん？どうしたんだい三人とも固まって？」
「「・・・」」
「ん？どうしたんだい三人とも固まって？」
　二人は意外みたいな顔をしているに対し飯田は不思議そうな顔をする。
　そんな飯田にお茶子は
「飯田くん…前々から気になってたんだけど…もしかして、坊っちゃん!?」
「坊!!」
「そ、そう言われるのが嫌だから一人称を変えてたんだ！つい癖で言ってしまった…ああもう！恥ずかしい…！」
「けど飯田は、オレンジジュースもいっつも飲んでるよな！」
　サソリが聞くと
「いや、これは違うんだ…俺の個性はエンジンで、オレンジジュースはエンジンのガソリ

ンとなるんだ！」
「へぇ！なるほど…！あとでメモしておこっかな…」
ボソリとつぶやく緑谷。
まさかオレンジジュースが飯田のエンジンのガソリンになるとは知らなかった。飯田は観念したかのような顔でこういう
「実は俺の家は代々ヒーローの一家なんだが、俺はその次男だ」
「ええーーーー!!」
緑谷とお茶子は、驚きのあまり大声をあげてしまう。
し、知らなかった…！ちなみにどんなヒーローの!?」
興奮して飯田に食いついてくる緑谷。
「…ターボヒーロー、インゲニウムは知ってるかい？」
「知ってるよ！たしか事務所で６５人もののサイドキックを雇ってる大物プロヒーローだよね！飯田くん、まさか…！」
緑谷はもしやと飯田家のことを予想した。
「ああ、それが俺の兄さ！」
「あからさま凄いや！」
飯田は自慢気にいうと緑谷はなお一層目をキラキラさせている。

だが飯田は
「俺の兄は人々を導く存在だ、だから俺はそんな兄に憧れた…だけど俺にはまだ人を導く立場は早すぎるんだと思う」
「飯田…くん」
（僕のヒーロー像がオールマイト…だけど飯田くんの場合はインゲニウム、飯田くんのお兄さんなんだ）
緑谷は、飯田の気持ちがよく分かった。
幼いころ緑谷はオールマイトにずっと憧れてた、何度も何度もネットの動画でオールマイトの活躍を観るくらいに。けど
（飯田くんは真面目だし…それに人の立場や状況を分かってる…飯田くん考えすぎなのかな、飯田くんは十分に人を導ける立場なのに……勿体無いな…）
声に出して言いたかったが、出すことが出来ずつい心のなかでそう呟いた。
「なんか飯田くんって凄いこと考えるんだね！凄いやすごいや！」
「す、凄いこと？ぼ…俺は兄と俺のことを言ったまでで別にそんな」
苦笑する飯田にお茶子はまた
「あー！飯田くん笑うところ初めて見た！」
「お、俺だって笑うときはあるぞ！」

「一様、飯田だって人だぞ」
お茶子と飯田はそんなやりとりをしているのに対し緑谷は安心、暖かい目で３人のやりとりを見守る。
その時
ヴヴヴヴヴーーーー!!!
警報がなった
「な、なんだ?!」
突然の出来事に驚く飯田にお茶子は驚きのあまり飲んでた味噌汁を吹き出してしまう。
緑谷なんかは食べてたカツ丼を途中で喉に詰まったために、水を飲んで腹を手で叩いている。
「これは警報…?けど一体何で」
首をかしげる飯田
『セキュリティ3が突破されました』
どうやらアナウンスがそういうと食堂にいたみんなは慌てて一斉に逃げるようにする
「セキュリティ3?何ですかソレは!?」

「学校の中のセキュリティだよ！誰かが潜入したんだ、今まで3年間そんなことなかったのに！君たちも早く逃げるんだ！」
3年生の先輩が逃げるようにそういった。
侵入者？一体誰が??
数分で行列となり動けなくなるぐらいになった
そして、サソリ
「(あれ、マスコミか)」
いち早くマスコミが犯人だと分かった
「飯田」
「どうした」
「これは、マスコミの仕業だ」
サソリは、飯田に伝えた

そして、外では
「オールマイト居るんでしょう!?出してくださいよ一言いただけたら帰りますから！」
「だから非番だっつーの！」
しつこいマスコミに舌打ちするプレゼント・マイク。

「だから一言いただけたらもう帰りますから！」
「一言とって二言欲しがるのがあんたらマスコミだ」
両手でなんとか落ち着かせるようにする相澤先生。
だが一向におさまらないマスコミ、流石に限度が過ぎてるので、プレゼント・マイクは相澤に舌打ちする。
「なあ、もうこれ不法侵入だ…ヴィランだぜこれ？ぶっ飛ばしてもいいかな…？」
「やめろマイク…あることないこと書かれるぞ、取り敢えず警察を待とう……連絡しておいた」
キレるマイクを止める相澤、相澤がとても大変そうだ。

学校内では
（先生方がマスコミを止めている…となるとみんなはこのことに気付いてない…そうだ！）
飯田はふと閃いた。自分が今取るべき行動を、自分が何をすべきか、どうすれば皆んなをまとめれるのか。
「赤砂くん麗日くんのところまで飛ばしてくれ」
「分かった」

飯田に糸をつけ麗日の所へ飛ばし
「麗日くん！俺を浮かしてくれ！」
「え？う、うん…分かった！」
するとなんとか、お茶子の手がギリギリ飯田の手に触れることが出来た。
個性で浮かされて飯田は
（目立つ場所で）
足のエンジンを使って
ドロロローーーン!!
エンジンの音が皆の頭上で響く。
すると回転するように扉の上の壁になんとかくっつき。
（短く！正確に！大声で！大胆に！）
そして大きな声で
「皆さん！大丈ーー夫!!」
するとようやく飯田に注目した。
今の飯田はまさに非常口の看板だ。
「皆さん落ち着いて下さい！ただマスコミが校内に入っただけです！」
そうすると

「なんだよ…」
「ビックリした～」
「驚いたぜ」
「押して悪かったな」
皆んながそう声を交わっている。
「まあ、それにしても飯田スゲェな！なんだそれ、非常口の看板じゃんか！」
感心する切島は飯田に指をさしてものを言う
サソリは、窓を見ると
変なヤツがいた
「なんだアイツ」
「クラス委員長、早く初めて」
教室内では、今度は委員決めを行うそうだ。カチコチしてる緑谷に八百万がそういうと
「で、では他の委員決めを行おうと思います…が、その前に…」
すると緊迫してた緑谷は、すぐに緊張を解きほぐし飯田をみる
「クラスの委員長は、飯田くんがやるべきだと思います」
「！」

緑谷の発言に飯田はおどろき固まってしまう。
緑谷は話を続けて
「だって…飯田くんは皆んなをまとめれることが出来たんだもん…僕は飯田くんがやるべきだと思います！」
「緑谷くん…」
緑谷に続き
「あっ、確かにそれいいな！緑谷もいいけど食堂のときの飯田カッコよかったしな！」
「非常口みたいだったしな」
納得する切島と上鳴に続きほかの皆んなも
「おー！確かにその方がいいよな！」
「非常口飯田頑張れよ～！」
砂糖に瀬呂
そして飯田の後ろのお茶子は
「良かったね、飯田くん！」
そして、サソリも
「俺も賛成だ」
お茶子とサソリは喋った、飯田はクスッと微笑んだ。

クラスの委員長である緑谷くんが言うなら仕方ないな！では俺がクラスの委員長になろう！」
飯田はみんなにそういうと
「おう！頑張れよ非常口飯田！」
「非常口～！」
飯田の名前はいつしか非常口などと名付けられたが飯田自身は嫌がってない様子だ。
「オイ…何でもいいが早くしろ…時間ないんだから」
ギロッとみんなを睨む相澤にみんなは静まり返る。
「では、まずほかの委員決めだが……！」

校門では
「……ねえ、普通に考えてさ…ただのマスコミに…こんなこと出来るかい？」
静かな声だが、そこには裏付け…まるでその原因を探るような、怒りを隠す声がそう響く。
身長は低く、白いネズミみたいな人が、そう、校長であった。
「そそのかした者がいるね…」
他の教師たちも『ソレ』を見てうなずくと

「邪な者が入り込んだか…あるいは…」
『ソレ』は今、目の前の校門の現状…校長先生はこう言った。
「宣戦布告の腹づもりか」
　校門のセキュリティバリアーが崩壊されていた。まるで枯れ葉を粉々にしたような
そのバリアーに、殺意と悪意が込められていた

五話

「よしお前ら、今日はヒーロー基礎学は…災害救助なんでもござれ…人命救助（レスキュー）訓練だ」

寝袋のポケットのなかから『ＲＥＳＣＵＥ』という文字が書かれてるプラスチックカードを取り出した。

教室内がザワザワと騒ぎ出す。

「うわ～…レスキュー訓練か…嫌だな」

「バッカお前、こういうのこそヒーローの本格的なヤツだぜ！」

多少嫌がる上鳴に切島は男魂、ヒーロー魂が燃えている。どっちなんだよ、と言ったら両方だぜ！と、答えてしまいそうだ。

「レスキュー訓練…そんなのやったことないなぁ～…一体どんなことするんだろう？」

「水難なら私の独壇場…ケロケロ」

蛙吹はみたまんま蛙だ、だから水中に関しては得意とするのだろう。

「災害救助訓練をやってもらう…そのためにまず」

相澤は寝袋のポケットからリモコンを取り出しポチッとボタンを押す。

すると左側の壁から番号が書かれてるバリアフリーみたいなのが出てきた。これはコスチュームである。

「訓練用の施設に向かうからお前らコスチューム持ってくるかは個人の自由だ」

そういうと皆んなはそれぞれのコスチュームを取り出す。

そしてサソリは、巻物の中からヒルコを取り出した

グラウンドに出るとそこにバスが待っている、どうや移動用のバスだそうだ。

雄英はグラウンドだけでなく、他にも様々な施設やグラウンドがあるため、移動はバスで行うそうだ。

皆んなそれぞれコスチュームを着用し集合している。

「あれ?デクくんコスチュームは?」

首をかしげるお茶子に緑谷は

「あ、ああアレ戦闘訓練の時に壊れちゃったからサポート会社に頼んで直してもらってるんだ!」

「あ、そっか〜!」

成る程という顔で納得するお茶子。緑谷のコスチュームは、この前爆豪と戦ったため大分コスチュームが痛んでしまい、修復を頼んだのだ。

「それに、サソリくんのコスチュームも直っただね」

「さらに、改良を加えた」
　この前にオールマイトに壊されたがサソリは、ヒルコに改良した
「やっぱコスチュームカッコ良いっつったら、轟とか爆豪とか…そこらへんだよな」
「君たち早くバスに乗るんだ、番号順に乗ろう！」
　ピッピッとホイッスルで皆んなをまとめ上げる飯田。
「早く行くぞ二人とも」
　サソリは、バスに乗りその目的地につくまで目を瞑った
　そして目的地につきバスから降りて施設の中に入ると、そこにはとても広い面積を持つ訓練所、様々な災害ゾーンが設置されていた。しかし見た目からしてそれは、娯楽場…いいや、ＵＳＪとも思わせるような施設なのであった。
「スッゲー！ＵＳＪかよ！」
　宇宙飛行士のようなコスチュームを着用した人が人差し指を立てて説明する。
「水難事故、土砂災害、火事…ｅｔｃ．　あらゆる事故や災害を想定し…僕がつくった演習場です。その名も…ウソの災害や事故ルーム！略して…ＵＳＪ」
「・・・」
　ボケのつもりかとサソリは、心に思った
「スペースヒーロー『１３号』だ！災害救助でめざましい活躍をしている紳士的なプロ

ヒーローー!」
「わーー私好きなの13号!・サイン欲しい!」
「うん!・僕も!」
うおおおー!と大きく叫び興奮する、その余り腕をブンブンと振っている。
そんな皆んなの状況をおかまいなしに相澤先生は後輩である13号に話しかける。
「13号…オールマイトは?・ここで待ち合わせてるハズだが」
「先輩…それが」
13号は指を3つに立てて説明する。
「どうやら通勤時に制限ギリギリまで活動してしまったみたいで、仮眠室で休んでます。あと少しだけなら顔を出せると言ってますが…」
「不合理の極みだなオイ…あの人本当にここでやってけれるのか?・」
誰にも聞こえない小さな声で二人は話し合っている。相澤はイラつく余りか顔をしかめているが、直ぐに生徒たちを見て
(まあ、念のための警戒態勢だ)
「仕方ない…始めるか」
切り替える。
「先生、今日は全部で何人ここに教師が来るのですか?」

と質問する八百万。
「俺と13号にオールマイトの3人だ」
「そうですか…ですが何故オールマイトがここに居ないのでしょうか?」
もちろん二人は皆んなが聞こえない程度で会話をしていたので、当然オールマイトについては知るはずが無い。
「連絡をとってる、そんなことより今は授業に集中しろ」
「分かりました」
なんとか切り替えることに成功した相澤。
「えー、では!始める前にお小言を一つ二つ…三つ…四つ…」
(増えてる…)
指を立てるのも増えていく13号に対し皆んなは心の中でつぶやく。
「えー、まず皆さんは僕の個性をご存知だとは思いますが…僕の個性は『ブラックホール』どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます」
13号は災害救助といった人助けを主に働くヒーローであるが、実際彼の持つ個性は、とてもじゃないが残酷で、驚異的で、その気になれば災害すら起こせるような個性だ。
「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね!例えばそこらに倒れてる危

険なものや、瓦礫、雪崩や土砂崩れと言ったものとか…火まで簡単に！」
　ヒーローを研究し尽くしたヒーローオタクの緑谷は、熱心に13号の個性を語り出す。横にいるお茶子は高速で顔を縦に振ってる。まるでシェイクを振ってる時の感じだ。緑谷の解説に頷く13号は、「ええ」と一言頷く。
「しかしそれと同時に簡単に人を殺せる強力な力です…皆んなの中にもそういう個性がいるでしょう。超人社会は個性の使用を資格制にし厳しく規制することで、一見成り立っているように見えますが一歩間違えれば簡単に人を殺せる『いきすぎた個性』を持っていることを忘れないで下さい」
　この社会では個性の使用を厳しくしているため、ある意味犯罪の抑止力にもなっている。しかひ難しい先はまた先の話になるであろう…
「相澤さんの体力テストで自身の秘められている力の可能性を知り、オールマイトの対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思います」
　相澤は入学初日に個性把握テストを、オールマイトは初めてのヒーロー基礎学にて戦闘訓練を。
「(なんだあの黒い霧みたいのは)」
　サソリが見た瞬間
「一かたまりになって動くな！」

大声で叫ぶ、初めて皆んなにみせる相澤の焦りの表情に…生徒たちは棒立ちで不思議そうな顔をする。
「13号!生徒を守れ」
「先輩…?」
ヘルメットを被ってて分からないが不思議そうな顔をしているのだろう、首をかしげる13号。
皆んなは相澤の向いている噴水広場に目をやった。
「オイオイ、何だアレ」
砂糖はそう言うと
「なに…これ……なんなの……?」
「アレは…敵ヴィランだ!」
相澤は黄色のゴーグルを装着して生徒たちに伝えるよう、大声でそう答える。
プロが何と戦っているのか
すると今まで開いていた黒い空間は閉じ、黒い霧を全身にまとっている男は不思議そうに呟いた。
「13号にイレイザーヘッドですか…先日頂いたカリキュラムでは、オールマイトがここに居るはずなのですが…何か変更があったのでしょうか?」

「やはり先日のはクソ共の仕業だったか」
舌打ちする相澤先生。
「アレが…敵……」
何と…向き合っているのか
「どうします？死柄木弔」
その黒い霧の男は、掌が顔についてる男　、死柄木弔にそう聞くと、
死柄木は呟く。
「…どこだよ…せっかくこんなに大衆引き連れてきたのにさ、オールマイト…平和の象徴…いないなんて…」
顔を見上げて、死柄木は子供たちを見てこう言った。
「子供を殺せば来るのかな？」
それは…途方もない悪意

六話

サソリは、ワープにより一人に成った
「(クソ変な霧みたいなヤツに飲み込まれてしまった)」
ワープした先には
「見ろ一人だけだぜ」
敵が何十人もいる
「俺だけのようだ、他にクラスの奴はいないな」
サソリは、辺りを見渡してると
「行くぜ」
何人かが一気に攻めてきたが
「一人ならいけるな」
ヒルコの口が開きその中のから複数の針が出てきた
そして、一気に攻めてきた敵に全て刺さった
「効くかよそんなもん」
針が刺さったままサソリに攻撃しようとしたが

針が刺さった敵が倒れっていった
「何をしたんだガキ」
他の敵がサソリに問いかけたが
サソリは無視しヒルコの口を開き攻撃をした
が5人の敵は、その攻撃をかわした
「やるな」
「ふざけやがって」
敵の口元が上に上がったすると
「隙ありだそガキ」
後ろから敵が不意をついてきたが
ヒルコから尻尾を出し相手に突き刺した
「甘い」
「くそ」
地面に這いつくばっている
「この毒は即効性があるからすぐに体が動かなくなる」
「やりやがったな」
敵は、イライラし始めていた

ヒルコの腕が上がり腕についていた枷を飛ばした
敵は、かわしだがその枷が爆発し、針を回りに飛ばした
敵に針が突き刺さり
「しまった」
「刺さったら終わりだ」
敵は動けなくなり、サソリは、相澤先生がいる所へ動き出した
サソリは、動いていると緑谷が個性を発動させ大きな水しぶきが起きた
「やるな緑谷」
サソリは、広場に着くと
相澤先生がやられているそして、敵の大将が梅雨に攻撃を仕掛けようとしていた
サソリは、動き
「危ねぇぞ」
サソリは、尻尾で攻撃を仕掛けたが
「危ねぇな」
気づかれ避けられた
そして
「砕けろ」

弔が尻尾に触れ尻尾が砕け落ちた
「ちっ」
「どうする気だよ」
弔は、笑っている
そして、サソリ
「仕方ねぇな」
ヒルコを巻物に戻した
そしてサソリの本物が出てきた
「なんだお前」
「答える必要ない」
「口寄せ・三代目風影」
巻物から出てきた一体の傀儡
サソリの指が動き
傀儡が弔に向かって行った
「その人形で殴って捕まえるきか」
サソリは、指をさらに動かすと
傀儡の右腕から複数の刃が出てきた

「違う、腕を一本位切り落としてでも捕まえる」
　傀儡は弔に向かって行ったが
「脳無」
　弔が叫ぶと
　先程まで、遠くで相澤先生を捕まえていた
　脳無が弔の前に来た
　そして脳無は、腕でカードした
「っち」
　刀は、脳無に刺さっていないそれどころか傷もついてもいない
「お前の刀じゃ脳無は、切れねぇよ」
　弔は、笑っている
「なら、仕方ない一気に方を付ける」
「砂鉄解放」
　すると、傀儡の口から砂鉄が出てきた
「この技で終わりだ敵」

七話

「行くぞ、砂鉄時雨」
　傀儡の回りに合った砂鉄が針の形になり
　敵に向かっていたが
　脳無前に立ち攻撃を防いだ
「お前なんかに脳無は倒せないよ」
　死柄木弔は、顔をニヤけながら喋った
「なら、これならどうだ」
　三代目風影が敵に向けて左腕を向けると前腕が開き開いた所から無数の手が出て来た
　その無数な手は脳無だけではなく奥にいた二人にも襲ってきた
　そして、手に捕まり身動きが取れなくなった
「どうしたさっきの威勢はどうしたんだ」
「ガキが」
　死柄木弔は、自分の個性を使い破壊にかかった

がしかし
「毒煙行くぞ」
死柄木弔を捕まえている近くの手から毒煙が出て来た
「黒霧」
「わかっています」
黒霧は、死柄木弔の所にワープゲートを作り逃がしその後に脳無と自分も逃げ出した
「大丈夫ですから」
黒霧は、死柄木弔に駆け寄り手を貸した
「大丈夫だ」
手を出したのを叩き自分一人で立ち上がった
「上に気を付けた方が良いぜ」
上を見ると砂鉄が立方体の形となり
死柄木弔達に襲ってきた
その攻撃にいち早く気づいた黒霧は死柄木弔と脳無を助けた
「黒霧あれで行くぞコイツを確実に殺す」
「はい」
「脳無」

脳無は、前にサソリが居ないはずなのにパンチを繰り出した
その瞬間黒霧がワープゲートを脳無がパンチを繰り出す所に出し
ワープゲートの転送場所は、サソリの後ろだった
それにいち早く気づいた出久は、サソリに
「後ろだ」
しかしサソリは、振り返りもせずに笑っていた
そして脳無の攻撃は、サソリに当たった
「俺達に逆らうからそうなるだよガキが」
サソリの体は、その場に倒れこみ頭や腕がおかしな方向へと向いていた
それを見て弔は、笑っている
「サソリが死んじまったよどうするんだよ次は、オレらだぞ」
「二人は、逃げて僕が時間を稼ぐから」
出久は、二人を庇うように前に出た
「次は、お前達だ」
そして弔は、次のターゲットを出久達に向けたが
弔の足元に三代目風影が来た
「何だよまだあるのかよとっとと消えろよ」

弔が三代目風影を蹴ろうとした瞬間
三代目風影は、起き上がり
刀がついてる方の腕で弔の胸と腹を切りつけた
「何でコイツは、動いてるんだよアイツ殺したはずなのによ」
明らかに死んだと油断していた為にモロに喰らってしまった
「大丈夫ですか！」
黒霧は、心配し弔の所へと駆け寄った
そしてサソリの体が変な方向へと曲がっていたのが戻っていく
「油断しすぎだったなお前ら」
そしてサソリは、立ち上がり服を脱ぐと
「残念だな俺も傀儡だからお前らの攻撃は、効かない」
皮膚ではなく傀儡と同じ体をしている
「さあ、続きの始まりだ」

八話

「さあ、続きの始まりだ」
「脳無アイツの体が粉々になるまで叩き潰せ」
「俺自身を使うのは体育祭までは、明かしたくは、無かったが状況が状況だしょうがないな」
脳無は、死柄木に命令された通りにサソリ目掛けて向かって来た
サソリは、それに対して脳無の方を向き
「一方通行で来るわけか…甘いんだよ捕まえてくれって言ってるようなもんだろ」
サソリは、腹部に収納しているワイヤーを上手く扱い脳無の攻撃を全て旋回して避けている。
そして、ある程度旋回を続け終わり脳無の周りに浮いていたワイヤを一気に締め付け始めた
「これでお前らの仲間の1人はこれで動けないだろうが俺は、この状態でも動く事が出来る」
サソリは、強がりを相手に見せていた

何故なら縛っているワイヤーが脳無の力の強さに耐えることが出来ないあと持ってあと数分しか持たないことを気づいているし少しでも亀裂でもはいるものならすぐに壊されてしまう

三代目風影の方に目線を向け動かし死柄木の方を向いた時には、サソリの目の前には居なかった

「赤砂くん後ろ！」

緑谷の言葉を聞いたサソリはすぐに後ろを振り返ってが既に遅く。

敵は、サソリが目線を外したのを見逃さなく黒霧のワープを使い死柄木は、サソリの片腕とワイヤーに触れていた。

死柄木も考えていた、ダメージが入らないなら体を壊して動かなくさせれば良いと

サソリの片腕は、崩れ落ち、ワイヤーが崩れたと同時に脳無もワイヤーを壊し動き出しすぐ様殴りに掛かると思われたが

緑谷が先に動き死柄木目掛けて飛び出して来たのである

「ＳＭＯＳＳＨ」

普段なら緑谷は、パンチを打つと腕が壊れていたが壊れずにいた

普通なら壊れないことが良いことだが逆に力がその分落ち脳無に防がれてしまいその分危なくなってしまった

「緑谷!」
　サソリは、片腕を使い糸をつけ緑谷を飛ばし助け出すことが成功したが自分の身を守る事が出来なくなりサソリは、脳無の一撃により飛ばされてしまった
　飛ばされたサソリは、ＵＳＪの入り口付近まで飛ばされ扉と激突するかと思われた時サソリを見事にキャッチした
「大丈夫かい赤砂少年。だがもう大丈夫何故って私が来た」
　オールマイトが助けに来てくれたのである
「オールマイト先生大丈夫です。俺は、まだ戦えます」
「大丈夫だそこで待っていたまえ」
　オールマイトは、サソリをその場に置き死柄木に向かうまでに他の敵を倒しながら向かって行く様を黙って見ていた、まだ自分には、至らないところがありながらと